

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第491号 平成25年2月12日

東京物語

先日、現在公開中の映画「東京家族」を見て来ました。しっとりとした、情感溢れる作品で、日本人の優しさを思い出させてくれる作品です。私は、この映画を見ながらどうにも涙が止まりませんでした。それは、年のせいで涙腺が緩くなったせいばかりではありません。周吉夫婦の年齢設定が私と近いせいもあってリアリティがあった事、加えて、今は亡き両親への思いが込み上げてきたからでもあります。

この映画は、山田洋次監督が監督として50年という節目を記念して製作されたものであり、小津安二郎監督による「東京物語」をモチーフにした作品です。

山田洋次監督は、優しい目で「家族」を見つめ続け、「家族」「幸せの黄色いハンカチ」「息子」「学校」「おとうと」など多くの作品を作り続けています。山田監督の作品をご覧になった方は多いと思いますが、私も、山田監督のファンであり、彼の作品からは多くの事を学んできたように思います。

さて、「東京家族」という作品は、瀬戸内海の小島に暮らす平山周吉（72歳）と妻とみこ（68歳）が、子ども達に会う為に東京へやって来た数日間の家族模様を描いたものです。

長男幸一は、町医者で妻文子と子どもが2人います。長女滋子は、美容院を営み夫庫造との二人暮らし。次男昌次は、舞台美術の仕事をしており、恋人紀子がいます。

彼らは、何処にでもいる普通の家族です。それぞれに自分の住む世界があり、その世界を守るために必死に頑張っているのですが、そこに、田舎から年老いた両親が自分達に会いにやってくるという訳です。

子ども達は、両親を迎える為に準備を進めますが、仕事の事や住宅環境の事もあり、大変です。決して迷惑と思っている訳ではありませんが、忙しくて思うようになりません。田舎からやってくる両親にしてみれば、せっかくやって来たのだから大いに歓待してくれるものと思っていたのですが、居心地の悪さはどうしようもありません。

仕事が忙しい幸一と滋子は、お金を出し合って両親に横浜のリゾートホテルに泊まってもらおう事にします。リゾートホテルの広い部屋で、周吉ととみこはただ外を眺めるしかありません。

周吉ととみこは、ホテルでの寝苦しい夜が明けると2泊の予定を切り上げ、滋子の家に帰ってしまいます。そんな両親に滋子は、今夜は商店街の飲み会があるのでいてもらっては困るといいます。仕方なく、周吉は同郷の友人（沼田）に会いに、とみこは昌次のアパートへ行くことになってしまいます。久しぶりの母親の手料理を美味しそうに食べる昌次、それを嬉しそうに眺めるとみこ。そこに、昌次が母に紹介しようと呼んだ恋人の間宮紀子が現れます。とみこは、一目で紀子の素晴らしい人柄を見ぬき、息子の将来を託します。

周吉の方は沼田に宿泊を断られた上に泥酔し、さんざん周りに迷惑をかけた上、幸一の家ですっかりしょげています。そこにとみこが帰ってきます。決して楽しい東京滞在ではなかった筈なのに「東京に来て良かった」と上機嫌です。しかし、何があったのか話す前に突然倒れ、目覚める事無く息を引き取ってしまいます。

島での葬儀には幸一や滋子らが顔をそろえますが、葬儀が終わると昌次と紀子を残して帰ってしまいます。

数日して、紀子が周吉に別れの挨拶をすると、それまでほとんど口を開かなかった周吉が、「息子を宜しく頼む」と深々と頭を下げ、とみこの腕時計を形見にと渡します。

昌次と紀子が島から去り、部屋には一人周吉が、静かな時を過ごしています。

「東京家族」は「東京物語」をモチーフにただけあって、登場人物も、ストーリーの展開も良く似ています。

「東京物語」は、1953年に制作されていますので、丁度60年前の作品という事になります。この作品は、戦後の日本が大きく変わりつつある中で、その渦に巻き込まれるように家族や親子の関係も変わって行く、そうした姿を静かに描いています。それはまた、将来の日本の姿を予兆させるものでもありました。

また、「東京物語」が描き出した家族の物語は、今日においても変わらない普遍的なテーマを私達に示しています。昨年8月、英国映画協会発行の「サイト・アンド・サウンド」誌が、世界の映画監督が投票で決める史上最も優れた映画に「東京物語」が選ばれたと発表していますが、それは、この作品の高い技術性と共に、そのテーマの普遍性にあるのではないかと思います。

3・11（東日本大震災）を経験して日本は今、苦悩しています。大きく変わろうとしているとあって良いでしょう。山田監督が、「東京物語」をモチーフにして「東京物語」のその後を描こうとしたのは、何故なのでしょう。この映画の音楽を担当した作曲家の久石譲氏は、「東京物語」が「人生は無である」と説いた映画だとすれば、「東京家族」は「人生は決して無ではない」と説いている映画だと思う、と述べています。私にも、そのメッセージは届いています。

「東京物語」には、戦死した次男の未亡人紀子が、この先も一人で生きて行く事

に不安を感じ、その心境を周吉に打ち明け、それを聞いた周吉は彼女の心情に強く心打たれて老妻の形見の時計を紀子に渡すというシーンがあります。これは、周吉の、時代の変化に取り残されていく事への覚悟と紀子との決別の意思表示であったと思います。

一方「東京家族」は、頼りないと思っていた次男昌次が、紀子に支えられ将来への希望を持って生きて行こうとしている事を知り、紀子に「息子を宜しく頼む」と深々と頭を下げ、老妻の形見の時計を紀子に渡すのです。

これは決して紀子との決別を意味していません。むしろ、老妻の腕時計を紀子に手渡したように次の時代を生きて行く若者たちへのバトンタッチ、後事を託すという心境なのではないかと思います。

それは余韻となって、私の心に残っています。(塾頭：吉田 洋一)